ち、研究の同意を得られた全ての患者を対象とした。ツムラ八味地黄丸エキス顆粒（医療用）（TJ-7）を 6 ヶ月間投与し、投与前と投与後で日本語版歩行障害質問票（WIQ）を測定する前後比較研究を行った。WIQ は ASO 患者の生活の質の指標として一般的に認められている。

【結果】 全 19 例のうち、脱落例 5 例を除く 14 例 23 肢について検討した。平均年齢 73.3±4.7 歳。6 ヶ月の内服により、WIQ の項目のうち、階段スコア以外の痛みスコア、距離スコア、速度スコアの 3 項目で有意に WIQ スコアの改善を認めた。また、WIQ スコアの合計値の中央値は 162.5 点から 308.0 点に有意に改善していた。全ての患者で WIQ の合計値は改善しており、14 例中 7 例（50%）で 100 点以上の著明な改善を認めた。

【結論】 八味地黄丸は間欠性跛行を有する末梢動脈疾患患者の QOL を改善させる可能性が示唆された。

P2-33.

開放性眼外傷の患者背景と予後についての検討

（眼科）
〇水井　　徹、馬詰和比古、村松　大弐
　後藤　　浩

【目的】 当院における開放性眼外傷の臨床像と治療成績を検討する。

【対象と方法】 東京医大病院で診断、治療した開放性眼外傷 44 例 45 眼について、診療録をもとに後ろ向きに検討し、患者背景、治療法、視力予後などを調査した。

【結果】 平均年齢は 59 歳。鋭的損傷は 12 眼、鈍的外傷による眼球破裂は 33 眼で、うち 55% に内眼手術の既往があった。受傷原因は転倒が 28 眼と最多で、労災該当が 10 眼であった。治療は創の縫合のみが 30 眼、一期的硝子体手術 11 眼、眼球摘出 2 眼、角膜移植 1 眼で、視力は logMAR 2.3 から最終的に 1.3 まで改善したが、光覚なしも 22% であった。治療後の平均視力は、鋭的外傷の log MAR 0.09 に対して鈍的外傷は 1.82 にとどまった。

【結論】 鋭的眼外傷は鈍的外傷による眼球破裂と比較して視力予後が良好であった。

P3-34.

地域在住高齢者の目的別の外出と主観的健康感の関連〜5 年間のコホート研究〜

（専攻生：公衆衛生学）
〇片岡　　葵
（公衆衛生学）
　菊池　宏幸、小田切優子、高宮　朋子
　福島　教照、井上　　茂

【目的】 高齢者の外出は多様な健康指標と関連するが、外出を目的別に捉えた研究はほとんど認められない。本研究は地域在住高齢者を対象に、目的別の外出と主観的健康感の関連を縦断的に明らかにする。

【方法】 ベースライン調査は、国内 3 都市の住民基本台帳から無作為に抽出した 65〜74 歳 2,700 名に質問紙を郵送し 2,045 名から回答を得た。5 年後に追跡調査への同意があった 1,314 名に質問紙を郵送し 979 名より回答を得た。分析対象者はベースライン調査で身体機能制限がある者、主観的健康感の低い者（SF-8 の全体的健康感の項目で 4 点以上）、就労者等を除外した 409 名である。1 週間における外出頻度は中央値より「週 6 回未満/以上」に分類した。外出目的は、買い物、仕事・ボランティア、友人・知人の訪問、散歩・運動、趣味・地域活動の 5 種類の目的別に頻度を尋ね、「週 1 回以下/より多い」に分類した。主観的健康観は SF-8 の全体的健康感の項目より「低群（4 点以上）/高群（3 点以下）」に分類した。追跡調査での主観的健康感を従属変数、ベースライン調査での外出頻度（1 週間および目的別）を独立変数、年齢、居住地、同居人、教育歴、飲酒、喫煙、Body Mass Index、身体活動を共変量としたロジスティック回帰分析を行った。

【結果】 1 週間における外出頻度が週 6 回未満であることと 5 年後の主観的健康感が低いことの間に、男性では有意な関連は認められなかったが、女性では有意な関連が認められた（OR=2.43 95%CI：1.17-5.22）。目的別外出について検討したところ、男性では、趣味・地域活動が週 1 回以下の群は、それより多い群に比べて主観的健康観が低い者の割合が高かった（OR=3.32 95%CI：1.17-12.08）。女性は目的別の検討では有意な関連は認められなかった。

【結論】 地域在住高齢者において、男性は趣味・地

域活動を目的とした外出が少ないことが、女性は目的を問わず 1 週間の外出頻度が少ないことが、主観的健康感が低いことと関連していた。

P3-35.
脊椎外科における術後早期再手術と医療安全

（整形外科）
○遠藤　健司、松岡　佑嗣、高松太一郎
村田　寿馬、関　　健、上原　太郎
鈴木　秀和、粟飯原孝人、西村　浩輔
山本　謙吾

【はじめに】 脊椎外科における周術期合併症は、5% から 9% に発生し（JNS2016, JSR 2013）、永続的障害を残すことがあるため、その予防と対策は重要である。近年、医療安全に関する社会的関心が高まる中、各診療場面における医療安全の客観的医学データを構築することが望まれる。今回、周術期に複数回手術が必要となった症例を検討し、脊椎外科における医療安全と当科の取り組みについて報告する。
【対象、方法】 対象は 2012 年から 2017 年まで行われた脊椎手術 1,455 例（平均 242.5 例/年）男性 845 例、女性 570 例、平均年齢 61.1±16.6 歳で、計画的複数回手術を除き、術後 2 か月以内に再手術を行った症例を検討した。
【結果】 2012 年から 2017 年までの術後周術期再手術は、39 例（2.7%）で男性 10 例、女性 29 例、平均年齢 63.8±15.9 歳であった。内訳は感染 25 例（1.7%）、血腫 5 例（0.3%）、髄液漏 5 例（0.3%）、スクリュー脱転 2 例（0.3%）、早期隣接椎間障害 2 例（0.3%）であった。
【考察】 脊椎周術期合併症の中でも、早期再手術を要する原因は、感染、血腫などによる神経障害発生に関与する要因が多かった。米国における調査では、腰椎術後合併症による 30 日以内の予期せぬ再入院の発生は、4.4% で創部感染が多かったとの報告があるが（Spine 2014）、当科においても創部深部感染が多く、感染に対する対策が特に重要であると考えられた。また、スクリュー脱転の原因として現在使用している X 線透視機器での操作の限界がありナビゲーションシステムの早期導入が望まれる。合併症に関する学会発表、論文作成の他、医療安全向上の対策として 2017 年より、科内グループ間の相互手術監査、術前のリスク評価、インシデント発生後のカンファ、多施設での脊椎専門家による医療安全カンファを開始した。

P3-36.
e ポートフォリオを用いた全科共通臨床実習日誌の活用状況について

（医学教育学）
○油川ひとみ、Breugelmans Raoul
（医学教育推進センター）
山科　　章、三苫　　博
（耳鼻咽喉科・頭頸部外科）
清水　　顕

【背景と目的】 e ポートフォリオを臨床実習の日誌として平成 27 年 4 月より医学科第 5 学年の臨床実習において、振り返りと教員からのフィードバックを行う活動を開始した。当初は、循環器内科学、産科婦人科学、救急・災害医学の 3 診療科のみであったが、翌年には耳鼻咽喉科・頭頸部外科、臨床検査医学、腎臓内科などが参加し、平成 29 年度からは、学生からの要望と教員の情報共有という観点から原則全診療科共通で使用可能とした。全科使用可能となって 1 年が経過し、平成 29 年度からは臨床実習の開始が第 4 学年の 1 月となったため、第 5 学年の 1 年間と第 4 学年の 4 か月間の使用状況について調査を行った。また、平成 28 年度耳鼻咽喉科・頭頸部外科の日誌のテキストマイニングを行い、e ポートフォリオから得られる情報について紹介する。
【方法】 学生の振り返りと担当教員からのフィードバックを診療科ごとに比較した。また、耳鼻咽喉科・頭頸部外科の日誌をテキストマイニングした。
【結果】 学生の書き込み数は、教員からのフィードバック数に比例していた。また、フィードバックの方法は、一人の教員が担当する場合、複数の教員が交代で行う場合、複数の教員が同時に行う場合など、それぞれの診療科の指導体制で異なっていた。活発に指導が行われている例として、平成 28 年度耳鼻咽喉科・頭頸部外科の日誌をテキストマイニングした結果、e ポートフォリオの振り返りから、実習で学生の印象に残った内容および学生が実習中にいだく気持ちが読み取れることが分かった。